

蜻蛉日記

校注古典叢書

校注古典叢書

# 蜻蛉日記

上村悦子校注

明治書院

著者略歴

上村悦子

京都市生まれ

昭和八年 日本女子大学校大学本科

文学部国文学科卒業

現在 日本女子大学名誉教授 文学博士

住所 東京都板橋区高島平三一〇—八—二〇二

著書 更級日記(後注)(昭27)

万葉集 現代訳と鑑賞(昭28)

万葉名歌(昭31)

蜻蛉日記 校本・書入(昭38)

蜻蛉日記 諸本の研究(昭47)

王朝女流作家の研究(昭50)

校注古典叢書

蜻蛉日記 定価二二〇〇円

昭和四三年四月三〇日 初版発行  
昭和五九年三月一〇日 十六版発行

著者 © 上村悦子

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 大沢印刷株式会社

代表者 大沢忠義

製本 正文文社

発行者 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六  
電話東京(二九二)三七四一(代)  
振替口座 東京三一四九一 番

(換印廃止)

# 目次

|                |     |
|----------------|-----|
| 凡例             | 二   |
| 本文             | 五   |
| 蜻蛉日記上          | 五   |
| 蜻蛉日記中          | 八〇  |
| 蜻蛉日記下          | 一七五 |
| 卷末歌集           | 二六五 |
| 解説             | 二七九 |
| 一作者            | 二七九 |
| 二作品            | 二八二 |
| 三研究史について       | 三〇三 |
| 四伝本および底本について   | 三〇九 |
| 五参考文献          | 三二七 |
| 蜻蛉日記関係系図・年表・地図 | 三三三 |
| 索引             | 三三七 |

## 凡 例

- 一 本書の本文は宮内庁書陵部蔵桂宮本蜻蛉日記三巻を底本とし、校訂にあたっては次の基準に従った。
- 1 かなづかいは歴史的かなづかに統一した。
- 2 なるべく底本の姿を示すことに努めたが、本文を読みやすくするために、適宜、かなに漢字をあて、濁点・句読点などをつけた。
- 3 現存の蜻蛉日記本文はきわめて誤謬、脱落が多く乱れているので、底本の本文を重要視はしたが、明らかに誤脱、衍字と推定されるところは、他本（主として阿波国本・吉田本・松平本・上野本など）により、また先学の研究成果を慎重に勘考の上訂正した。その場合、明らかに誤謬・脱落・衍字と見られるものは煩を避けて頭注には掲げなかった。ただし、文章の意味に関係のあるものや、先学において異見のあるものは頭注に底本の本文を明示して復元を可能ならしめた。
- 4 あて字は正しい漢字またはかなに改めた。「も」または「む」の表記に用いられた「ん」もそのままにし、誤解されるおそれのあるものは「も」「む」に改めた。
- 5 活用語を漢字でしるして、活用語尾をおくっていない場合には活用語尾を補った。

6 適宜、段落を分け、会話には「」をつけ、会話中に引用された第三者のことばなどには『』をつけ、さらにその中に引用された第三者のことばには〃〃を付した。

7 使用者の便を考え、読みにくい漢字や読み誤りやすい漢字には、適宜「ふりがな」を付した。

8 「ゝ」「ゝゝ」などの反復記号は原則として底本のままにしたが、かな書きで品詞をことにする場合などは反復記号を避けて、同文字をくりかえした。

9 底本の傍記はしるさず、必要なものは注にあげ、和歌の下には国歌大観の番号を付した。

## 二 頭注については次の基準に従った。

1 注釈を必要とする語句については、簡潔に解説し、辞典で容易に検索しうる語句は省略した。

2 校異に関しては、底本に疑いのあるものについてのみ「底本・△△」と明示した。

3 妥当と思われる旧注や先学の秀れた高説は簡潔に掲載させていただいた。

4 引用文を除いては当用漢字や新かなづかいを用いた。

三 卷末歌集は底本をはじめ、伝来の諸写本・版本にも付載されており、またほぼ同じ内容のものが宮内庁書陵部に「傳大納言殿母上集」、「道綱母集」の題号をもって二本所蔵されている。

四 本書の執筆に際しては秋山虔氏、木村正中氏に終始ご援助をいただいた。ここに記して深甚の謝意を捧げる次第である。また、喜多義勇先生はじめ先学者の学恩に心からお礼を申し上げたい。



1 このようにはかなく過去の月日も過ぎてしまつて。

2 はつきりしない状態で。

3 容貌も十人並みとはいえず。

4 外形的な「かたち」に対し内面的な精神的能力をいう。宇津保「顔かたち、心だましひ、身のさえ人にすぐれ」(藤原君)同(忠こそ)、源氏物語に例あり。

5 こんな不甲斐ないような人生を送つて。

6 役立たずであるのも。

7 底本・おほかた

8 この上ない高い身分の人の妻の実情はどうだったかという問いに対する解答の例にも。

9 記憶が薄れてはつきりしないので。

10 何とか辛抱出来る程度の記述。書かずともよい事。

11 底本・「あのけかりし」、解環の説に従う。軽薄の意。或いは「おほけ(あふけ)なかりし」か。

12 柏木に葉守の神が宿るといふ信仰から宮中を守護する兵衛、衛門の異名となる。兼家天曆五年五月右兵衛佐(公卿補任)。

## 蜻蛉日記 上

かくありし時過ぎて、世の中にいとはかなく、<sup>2</sup> ともかくにもかで、世にふる人ありけり。

かたちとても人にも似ず、こゝろだましひもあるにもあらで、<sup>5</sup> かうもの<sup>6</sup>のえうにもあらであるも、ことわりと思ひつゝ、たゞふしおきあかしくらすまゝに、世の中におほかる<sup>7</sup>古物語<sup>ふるものがたり</sup>のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなん、天下<sup>8</sup>の人のしなたかきやと問はんためしにもせよかしとおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかりければ、<sup>10</sup> してもありぬべきことなんおほかりける。

さて、あはつけかりしすぎごとどもの、それはそれとして、<sup>12</sup> 柏木の

1 求婚の意を伝えさせよう。天  
曆八年(九五四)、兼家二十六  
歳、作者十八、九歳位か。  
2 しかるべき手廻を求めたり、  
お邸づとめの初老の女房などに  
取纏がせる。

3 騒ぐのは家の人々。  
4 使者の取り扱い方に困惑し  
て。

5 極めて立派な字を書くもの。  
6 兼家の筆蹟ではあるまい。

7 兼家歌。風雅集卷十恋一に  
「かなしな」が「かひなし」で  
入る。お評判を伺っているだけ  
でまだご麗姿に接する光栄を得  
ないのは残念です、おめにかか  
って私の心情を述べたい。

8 母、主殿頭春道女。  
9 道綱母歌。風雅和歌集卷十恋  
一に入る。お相手をする即ち求  
婚をお受けする女のいない所へ  
いくらお申し込みいただいても  
無駄でございます。甲斐に卵を  
掛ける。卵、声、時鳥の縁語。

木高きわたりより、かくい<sup>1</sup>はせんと思ふことありけり。れいの人は、  
案内するたより、もしは、なま女などしていはすることこそあれ、こ<sup>2</sup>  
れは親とおぼしき人に、たはぶれにも、まめやかに、ほのめかしし  
に、「びなきこと」といひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人  
して、うちたゝかす。「たれ」などいはするにはおぼつかなからず、  
さわい<sup>3</sup>だれば、もてわづらひ、とりいれてもてさわぐ。

見れば、紙なども、れいのやうにもあらず、いたらぬところなしと  
聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまであしければ、いとぞあや  
しき。ありけることは、

音にのみ聞けば悲しなほとゝぎすことかたらはんと思ふこゝ  
ろあり (六)

とばかりぞある。「いかに。返りごとはずべくやある」などさだむる  
ほどに、古代なる人ありて、「なほ」と、かしこまりて書かすれば、  
語らはん人なきさにほとゝぎすかひなかるべき声なふるし

10 一寸もお返事がないのは貴女は音無の滝の水なのだろうか。いつお逢い出来るかわからない逢瀬を求めている私は本当に頼りない気がする。音無の滝は諸国にあるがここは京都市左京区大原、来迎院付近、呂律川にある滝か。

11 私の心中が知られているかのように(挿入句)。痴れたる(正常な理性を失っている)の解あり。

12 帰り、返り掛け詞。

13 古代なる人即ち母。

14 そつなく書かれた代筆の文。

15 兼家歌、お手紙を贈つてもお返事をいただけないのは貴女に私以上にいい方がおありなので私の手紙も心持ちも全く無視してしまわれるのでしょうか。

なごさに無を掛け、ふみに文と踏を掛ける。古今集東歌(二〇三)の「君をおきて」や後撰集の平貞文の「浜千鳥」(六六)の歌によるもの。浜、渚、千鳥は縁語。

そ (六二)

これをはじめにて、またくもおこすれど、かへりごともせざりければ、又、

10 おぼつかない音なき滝の水なれやゆくへも知らぬ瀬をぞたづぬる (六二)

これを、「いまこれより」といひたれば、<sup>11</sup>知れたるやうなりや、かくぞある。

人しれずいまやくと待つほどにかへりこぬこそわびしかり<sup>12</sup>

けれ (六三)

とありければ、<sup>13</sup>れいの人、「かしこし、をさくしきやうにもきこえんこそよからめ」とて、さるべき人して、あるべきに書かせてやりつ。<sup>14</sup>それをしもまめやかにうち喜びて、しげう通はす。またそへたる文見れば、

15 浜千鳥あともなごさにふみ見ぬはわれをこす波うちやけつら

ん (六)

このたびも、れいのまめやかなるかへりごとする人あれば、まぎらはしつ。

又もあり。「まめやかなるやうにてあるも、いと思ふやうなれど、このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな」など、まめ文のはしに書きてそへたり。

いづれともわかぬ心はそひたれどこたびはさきに見ぬ人のが  
り (六五)

とあれど、れいのまぎらはしつ。かゝれば、まめなることにて、月日は過ぐしつ。

秋つ方になりにつけり。そへたる文に、「心さかしらづいたるやうに見えつるうさになん、ねんじつれど、いかなるにかあらん、

鹿の音もきこえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見る

かな (六六)

1 几帳面にお返事下さるのもの。

2 御本人の手紙が。

3 御本人の許へ届くにせよ、代筆者の許にしか届かぬにせよ、区別しない私の真心。

4 底本・そへ

5 作者が賢ぶった冷たい態度をとっている。

6 兼家歌。鹿の鳴く山里ならともかく鹿の声も聞えない都に住みながら不思議に眠れないことだ。古今集秋上忠岑の「山里は」(三三)の歌による。

7 道綱母歌。高砂は兵庫県加古川市。加古川の川口辺の地名。鹿の名所。「しか」に然かと鹿を掛ける。

8 兼家歌。逢坂の関は「逢う」という名を持っているのにどういふんだらう。近くても（逢えそう）こえ難い（逢えない）のですと嘆いている。「なかなか」でも意は通ずる。

9 底本・なかなり

10 道綱母歌。新千載恋三に入る。なこそ―常陸の国と磐代国との境、今の福島県勿来市にあった関。来るなを掛ける。難きに固きを掛ける。

11 兼家歌。新婚翌朝の後朝（きぬぎぬ）の歌。貴女に逢える夕方待つ間に、涙が一杯こぼれて川となる。ゆふぐれに結（紐で結ぶ）、樽（山から伐り出し筏にして川に流す木）を夕暮れ、流れると泣かれる、大井に多いを掛け、川の縁語であやなす。

とあるかへりごと、

<sup>7</sup>たかさご 高砂の尾<sup>を</sup>の上<sup>へ</sup>わたりにすまふともしかさめぬべき目とはきかぬを（六七）

げにあやしのことや」とばかりなん。

又ほどへて、

<sup>8</sup>逢坂の関やなになり近けれどこえわびぬればなげきてぞふる

かへし、

<sup>10</sup>こえわぶる逢坂よりも音にきく勿来<sup>なこそ</sup>をかたき関としらなん（六七）

などいふ。

まめ文通ひく／て、いかなるあしたにかありけむ、

<sup>11</sup>ゆふぐれのながれくるまを待つほどに涙おほるの川とこそなれ（六七）  
かへし、

思ふことおほるの川のゆふぐれはこゝろにもあらずなかれこそすれ（六七）

1 露頭(ところあらわし)をし、  
新婚兩人はみかの餅を食べる。  
2 兼家歌。露のおくしののめに  
起き貴女との飽かぬ別れの辛さ  
に心も消え入るの意。起き、置  
き掛け詞。置く、空、消えと露  
の縁語であやなす。

3 露はまことにはかないもの、  
その露に貴男はご自分を擬して  
いられるが、それにもましてあ  
てにならない貴男をたのみにさ  
せるなんて。こんなにもはかな  
い私は一体何なのでしょう。

4 道綱母歌。思いがけない所で  
過ごしていると涙がとどめなく  
こぼれ落ちてゐる。作者自身を  
撫子にたとえ可憐な風情を出し  
ている。折る、居る掛け詞。

5 底本・けり  
6 道綱母歌。後拾遺集恋二に入  
る。貴男のおいでがないので消  
え入りそうな悲しい気持ちで夜  
を過ごした今朝、その涙がまだ  
乾かないのに空までがしぐれて  
いる。

また三日ばかりのあしたに、

2 しゆめにおきける空はおもほえであやしく露と消えかへり  
つる (七三)

かへし、

3 さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれはな  
になり (七三)

かくてあるやうありて、しばし旅なるところにあるに、ものして、  
つとめて、「今日だにのどかにと思ひつるを、びなげなりつれば。い  
かにぞ。みには山がくれとのみなん」とあるかへりごとに、たゞ  
おもほえぬ垣ほにをれば撫子の花にぞ露はたまらざりける<sup>5</sup>  
などいふほどに、九月になりぬ。(七四)

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほど、文ばかりあるか  
へりごとに、

6 消えかへり露もまだひぬ袖のうへに今朝はしぐるゝ空もわり

7 第四句「けさや時雨と」で続拾遺集恋四に入る。天象の雨でなく私の悲恋の涙雨である意。

8 道綱母歌。後拾遺集雜二に入る。兼家を柏木、作者を下草にたとえた。歌意「来る」の言葉があてにならず、そのたびに悲しみの涙をこぼしています私に、そうと知りつつ、貴男の庇護の下にある者として、夕暮れごとに頼りにせよといわれるのですか。漏、守掛け詞。

9 兼家歌。新勅撰集恋二に入る。衣を裏返してねると恋しい人の夢が見られるという俗信。古今集にも小町の「いとせめて恋しき時はぬば玉の夜の衣を返してぞ着る」とある。本歌か。

10 父倫寧陸奥守に任官。

なし (毛)

たちかへり、かへりごと、

思ひやる心の空になりぬれば今朝はしぐると見ゆるなるらん  
とて、かへりごと書きあへぬほどに見えたり。 (毛)

又ほどへて、見えおこたるほど、雨など降りたる日、「暮に來ん」  
などやありけん、

かしは木の森の下草くれごとになほたのめとやもるを見る  
かへりごとは、みづから来てまぎらはしつ。 (毛)

かくて十月になりぬ。こゝに物忌なるほどを心もとなげにいひつゝ、  
歎きつゝかへす衣の露けきにいと空さへしぐれそふらん (毛)  
かへし、いとふるめきたり。

思ひあらばひなましものをいかでかはかへす衣のたれも濡る  
らん (毛)

とあるほどに、わがたのもしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。

- 1 兼家。
- 2 作者が父と顔を見合わせるた  
びに。
- 3 夫なる兼家。
- 4 殿（兼家）の心はいつまでも  
その言葉どおりである筈がな  
い。

- 5 底本・又みなる。倫寧の傍に  
ある意。
- 6 姿の見えなくなるまですつか  
り見送ってしまった後に。
- 7 氣をとり直して。心を沈めて。  
底本「よりて」なし。
- 8 倫寧歌。後拾遺集別に入る。  
歌意は兼家殿、貴殿ばかりを頼  
りとして娘を京に置いて旅立つ  
私の心持ちでは私の旅の行く末  
が大層遠く思われると同様に、  
貴殿と娘との契りも末長いよう  
に感じられ、それを心から祈ら  
れます。旅に度を掛ける。
- 10 作者の面倒を見る人。兼家。

時はいとあはれなるほどなり。人はまだ見馴るといふべきほどにも  
あらず。見ゆるごとに、たゞさしぐめるにのみあり、いと心こころぼそく悲  
しきことのものに似ず。見る人も、いとあはれに忘るまじきさまにのみ  
かたらふめれど、人の心はそれにしたがふべきかはと思へば、たゞひ  
とへに悲しう心こころぼそきことをのみ思ふ。

いまはとて、みな出で立つ日になりて、ゆく人もせきあへぬまであ  
り。とまる人、はたまいていふかたなく悲しきに、「時たがひぬる」  
といふまでも、え出でやらす、かたへなる硯に文をおしまきてうち入  
れて、又ほろ／＼とうち泣きて出でぬ。

しばしは見むころもなし。見いでてぬるに、ためらひて、より  
て、なにごとぞと見れば、

きみをのみたのむ旅なる心には行末遠くおもほゆるかな（六）  
とぞある。見るべき人見よとなめりとさへ思ふに、いみじう悲しうて、  
ありつるやうに置きて、とばかりあるほどにものしためり。

11 悲嘆に沈みきっているのは。

12 兼家歌。後拾遺集別に第二句「たのむといはば、第四句「松の千代をも」、第五句「きみ」で入る。「行末の松」に「末の松山」を掛け古今集の「君をおきて」の歌をふまえ仇し心を持たぬことをいう。又松の契りに千年のかたらいを誓う。

13 底本・たち

14 天曆八年十二月五日法華八講のため登山の師輔（扶桑略記）に同行か。

15 底本・「る」なし。

16 道綱母歌。横川（比叡山三塔の一）を川と見立て、こほる、水、降る、雪、消える等縁語であやなす。

17 天曆九年（享徳、兼家二十七歳、作者十九歳位、道綱一歳。

目も見あはせず、思ひいりてあれば、「などか。世の常のことにこそあれ、いとかうしもあるは、われをたのまぬなめり」などもあへしらひ、硯なる文を見つけて、「あはれ」といひて、門出のところに、われをのみたのむといへば行末の松の契りもきてこそは見め  
(八二)  
となん。

かくて日のふるまゝに、旅の空を思ひやるこゝちいとあはれなるに、人の心もいとたのもしげには見えずなんありける。

しはすになりぬ。横川<sup>14</sup>にもものすることありて、登りぬる人、<sup>15</sup>「雪に降りこめられて、いとあはれに恋ひしきことおほくなん」とあるにつけて、

<sup>16</sup>こほるらん横川の水に降る雪もわがごと消えてものは思はじ  
(八三)  
などいひて、その年はかなく暮れぬ。

<sup>17</sup>正月ばかりに、二三日見えぬほどに、ものへわたらんとて、「人來  
ば、とらせよ」とて、書き置きたる。

1 道綱母歌。うぐひすのうくに  
憂くを掛ける。素性集の「うち  
たのむ人の心のつられければ野に  
も山にもいざかくれなむ」によ  
る。歌意、私の将来がどうなるか  
知られないので我が身を憂く感  
じ、鶯の如く声をあげて泣きな  
がら野山に出て行きます。

2 底本・うちより  
3 懷妊のこと。  
4 道綱出産のこと。

5 道綱母歌。拾遺集雜賀に第四  
句「われやとだえに」で入る。  
うたがはしに橋を掛け、わたす、  
とだえはその縁語。「とだえの  
橋」は陸奥の名所という。  
6 底本・心へなう

1 知られねば身をうぐひすのふりいでつゝなきてこそゆけ野に  
も山にも (八三)  
かへりごとあり、

うぐひすのあだにてゆかん山辺やまべにもなく声聞かばたづぬばか  
りぞ (八四)

などいふころより、<sup>3</sup>なほもあらぬことありて、春夏なやみ暮らして、  
八月つごもりにとかうものしつ。<sup>4</sup>そのほどの心ばへはしも、ねんごろ  
なるやうなりけり。

さて九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを、手まさ  
ぐりにあけて見れば、人のもとに遣らんとしける文あり。あさましさ  
に、見てけりとだに知られんと思ひて、書きつく。

5 うたがはしほかにわたせる文見ればこゝやとだえにならんと  
すらん (八五)

など思ふほどに、<sup>6</sup>むべなう、十月つごもりがたに、三夜みよしきりて見え